

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01042

研究課題名（和文）イングランド初期ステュアート朝議会と教会統治 - イギリス革命の再評価にむけて -

研究課題名（英文）Early Stuart Parliaments and Church Government: Rethinking the English Revolution

研究代表者

那須 敬 (Nasu, Kei)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：40338281

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、イギリス革命期におけるイングランド議会によるさまざまな宗教政策とその歴史的背景を再検討し、国王対議会、国教会対ピューリタン、という従来の革命解釈に代わる理解のモデルを示した。教会制度の改革、教会音楽の改革や偶像破壊、異端の取り締まり、スコットランド契約派との交渉過程などが考察の対象となった。また考察対象を時間的・空間的に広げ、国教会聖職者をめぐる1620年代の議会論争や、1630年代のアイルランド教会改革についても考察した。明らかになったのは、聖職者の教権に頼らず、世俗の立法機関としての議会が主体となる宗教改革という一貫したモチーフである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イギリス革命史については、かつての楽観的・進歩主義的な歴史叙述に代わる新しい歴史像が定着しているとは言いがたい。本研究は、16世紀から17世紀へと連続する「長い宗教改革」の観点から、教会と議会の関係がどのように変化したかを論じた。宗教と政治の関係、近代と世俗化というより普遍的な問題を考えるために有益な視点を提供したと考える。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project was to reconsider various religious policies of the Long Parliament during the English Civil War. The reformation of the church government, reformation of church music, iconoclasm, regulation of unorthodox religious ideas, and the problematic relation with the Scottish covenanters were among the subjects covered. The turbulent debates in parliament over the Arminian clergy in the late 1620s, and the Laudian reformation of the Church of Ireland in the 1630s were also discussed. One key focus was on anticlericalism and the concept of parliament-led reformation.

研究分野：近世イギリス史

キーワード：イギリス革命 宗教改革 イギリス議会史 近世アイルランド史

1. 研究開始当初の背景

1640年代のイギリス革命の解釈については、ホイッグ的な進歩主義史観、ヴェーバー的な近代化理論、あるいはマルクス史学的な階級闘争モデルといった伝統的な枠組みがいわゆる「修正主義」世代の研究者たちによって否定されて久しい。これらに代わって「三王国戦争」論や複合国家論、すなわちイングランド、スコットランド、アイルランドという、同じステュアート王権下でありながら異なる歴史的背景と政治的特徴をもち、互いに非対称な関係を結ぶ複数の領域のあり方を分析する視点が、概説書レベルにおいても定着している。しかしながら、1630年代にはじまる一連の衝突の引き金となった宗教問題については、いまだに「ピューリタン革命」史観、すなわち「アングリカン(国教会)」対「ピューリタン」、「カトリック」対「プロテスタント」、あるいは「国家教会体制」対「良心の自由」といった二項対立に頼った説明の枠組みが、いまだに根強い。たしかに、同時代人びとの自他認識にそのような対立的思考が大きな影響を与えていたことに間違いはない。しかし、1640年代のイングランド議会(通称「長期議会」)が行ったさまざまな宗教政策を「ピューリタニズム」で説明し、議会の宗教政策の根底にあった根深い聖職者不信、すなわち反教権主義(アンチクラリカルズム)の影響を見過ごすならば、イギリス革命の全体像をゆがめるだけでなく、長期的なイングランド宗教改革史の中での革命の位置づけを誤ることにもなりかねない。本研究は、この問題に対する解決の糸口を求めて構想された。

2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、内戦・革命期のイングランド議会による政策決定の過程を、初期ステュアート王朝(ジェームズ6/1世、チャールズ1世)時代における宗教政策からの連続性のなかで捉え、新しいイギリス革命像を示すことであった。

そのために、主に三つの目標を設定した。すなわち(a)分析概念としての「ピューリタニズム」に頼らずに、初期ステュアート期イングランドの宗教政治についての理解を深めること、(b)教会統治における「至上権」の問題を、王権、議会、国教会の関係に注目しながら考察すること、(c)テューダー朝から名誉革命期までを射程に入れた、二世紀にわたる「長い宗教改革」論の中での、1640年代の革命の位置づけを明確化すること、である。

3. 研究の方法

先行研究を参照しつつ、理論的な枠組みを構築した。とくに、初期ステュアート期の宗教政治、アルミニウス主義、エラストス主義、コモンローと議会主権論などに関する先行研究から多くの示唆を得た。

マニスクリプト史料を中心とする一次史料の調査は、2019年度にロンドン、オクスフォード、ケンブリッジ、リンカーンの、2022年度にはロンドン、オクスフォードの文書館・図書館にて行った。2020年度および2021年度はコロナウィルスによる感染症の拡大によりイギリスでの調査が実現しなかったが、EEBOやState Papers Onlineなどの史料データベースや、メールオーダーでの史料取り寄せなどのサービスを活用した。史料撮影が許可されている文書館ではデジタルカメラによる撮影とデータ収集を行い、それ以外ではPCによる書き起こしを行った。

研究成果は、研究会等で関連分野の研究者との意見交換を重ねながら執筆を行い、以下にのべる出版物の形にまとめた。

4. 研究成果

上述の通りコロナウィルスによる感染症の拡大により、予定していた3年目の史料調査活動が延期となり、結果的に2年間の研究期間の延長を申請した。しかし最終的には当初目標とした研究の目標はおおむね達成できたと考えられる。

主要な研究成果は、単著一冊、共著二冊において発表した。まず単著『イギリス革命と変容する宗教：異端論争の政治文化史』(岩波書店、2019年)では、研究代表者がこれまでに取り組んできたイギリス革命期の宗教対立の研究に、本研究課題の成果を組み合わせることによって、1620年代後半から1660年の王政復古にいたる歴史的コンテキストの中にイギリス革命を位置付けた。とくに、チャールズ一世即位後はじめの10年間のアルミニウス派聖職者のネットワークの分析、1620年代のダラム大聖堂における礼拝様式をめぐる論争やイングランド議会における反教権主義の関係の分析を行ったことは、1640年代の宗教政治を理解しなおす上で重要な足

がかりとなった。二度にわたるイングランド内戦の動向に決定的な影響を及ぼした、スコットランド契約派とイングランド議会派の「厳粛な同盟と契約」とその失敗は、1620年代にすでに明らかであった教権主義とエラス투스主義の緊張関係なしには十分に説明することができない。同様に、ホイッグ的な「宗教的寛容の発達史」においては保守・反動勢力としてのみ位置付けられてきたイングランド長老派による反「異端」運動についても、教会改革の主体をめぐる長期議会と聖職者集団の対立の中で、新たに位置付けることができた。

共著『比較革命史の新地平：イギリス革命・フランス革命・明治維新』（山川出版社、2022年）では、「イングランド議会と教会統治権」（第5章）で、「宗教と革命」という大きなテーマから、イギリス革命を論じた。ここでは、上述の単著『イギリス革命と変容する宗教』で取りあげたさまざまな個別の事例研究の成果を、「議会主導による宗教改革」という一貫したモチーフの上で解説し、フランス革命との比較を行った。

共著『複合国家イギリスの地域と紐帯』（刀水書房、2022年）におさめた「アイルランド教会とイングランド国教会」（第5章）では、本課題の研究対象である初期ステュアート朝の宗教政策の問題を、アイルランド宗教改革史という、いわばイングランドとパラレルの関係にあるコンテクストの中で考察した。17世紀アイルランドがプロテスタント優位の植民地政策の対象となった事実、にもかかわらず人口の大多数のプロテスタント化に「失敗」したという事実から、この時期のアイルランド教会（プロテスタント）は歴史的にも注目されることが少ない。しかし本研究では、1630年代におけるチャールズ一世とカンタベリ大主教ロードによるアイルランド教会改革が、イングランド議会の反教権主義に直面した彼らの1620年代の経験と結びついており、さらに後に激しい批判と反乱を引き起こすことになるスコットランド教会改革にとっても重要な意味をもっていた可能性を論じた。

以上のように、イギリス革命と宗教の問題を、時間軸においては1640-50年代の革命期にとどまらず、より長期的なスパンで論ずるメリットを示したこと、また空間的にはイングランドにとどまらず、三王国における宗教政策を比較する視座を提示したことは、本研究課題の大きな成果であったと考える。今後は、王政復古期への取り組みも強化しながら、近世イギリス史における聖俗権力の相克の問題を検討したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 岩井淳(編)、道重一郎(編)、山本信太郎、仲丸英起、小林麻衣子、那須敬、山本正、竹澤祐丈、菅原 秀二、菅原未宇、辻本諭	4. 発行年 2022年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 『複合国家イギリスの地域と紐帯』	

1. 著者名 岩井淳(編)、山崎 耕一(編)、菅原秀二、高橋暁生、那須敬、竹中幸史、穴井佑、平正人、塩出浩之、三谷博、山本信太郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 352
3. 書名 『比較革命史の地平：イギリス革命・フランス革命・明治維新』	

1. 著者名 那須敬	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 264
3. 書名 『イギリス革命と変容する 宗教 : 異端論争の政治文化史』	

1. 著者名 君塚直隆(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 184
3. 書名 『よくわかるイギリス近現代史』(第3、4、5、6章を執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------